

# portfolio

私の分岐点  
第12回〈最終回〉

小原啓子さん  
Keiko Obara

株式会社デンタルタイアップ代表取締役

小原啓子さんは挑戦する人だ。現在彼女は、歯科医院の“経営変革の請負人”として、全国数多くの歯科医師、歯科衛生士、スタッフから厚い信頼を寄せられている。その背景には、いくつもの分岐点となる出来事があった。

歯科衛生士養成校の教員として、歯科衛生士の歩みが始まった。教育に携わること10年、慣れ親しんだ環境に甘んずることなく、次の舞台である口腔保健センターに異動、さらなるキャリアアップに臨んだ。臨床に出てからの10年で、学んだことも多くあった。そして、20年分のキャリアと自信を引っ提げて、再度教育の現場に挑戦することになった彼女は、よりよい教育を行えることを確信していたし、何より情熱があった。

しかし、現実は厳しかった。一人の“プレーヤー”から、教務主任として“マネジャー”の立場を担うことが求められるようになると、壁にぶつかることが多くなった。「教えることがつらかった」と語るほど、悩んだこともあった。

「40代のころは苦しかった。何でもうまくいくときもあれば、いくら努力しても何ともならないこともある。人は、立ち止まらなければいけないときもあると気づきました」

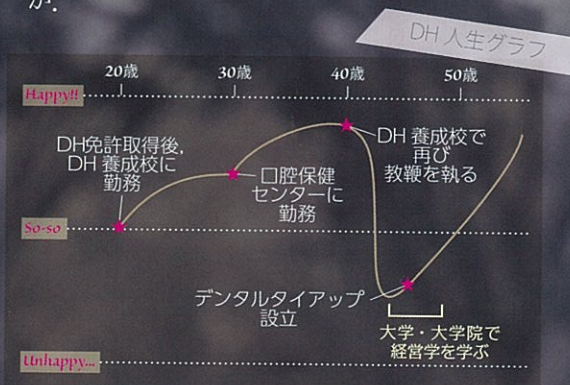
そのようなとき、自動車免許取得のために通っていた教習所で気づいたことがあった。「人に習うことがこんなに楽しいんだって、いまさらな

がらに思った」。自分にまだ、学ぶことで喜びが得られる感覚があることが新鮮だったのだ。

その後は、欠けていたものを取り戻すかのように、学ぶことに対して貪欲だった。大学、大学院と進んだ。選んだのは、「問題の解決の仕方」を学ぶ経営学。未知の分野への挑戦だった。年下の友人といっしょに勉学に励み、ときには小原さんのために、友人が深夜まで勉強につきあってくれたこともあった。「授業についていくのがやっとで、コテンパンにやられました」と、当時を振り返る表情は何だか嬉しそうだった。

そして会社を立ち上げた彼女は、「歯科学」と「経営学」を融合させ、医院経営の変革に取り組むことになる。「経営学は、生活をしていくために必要な学問です」と、胸を張る姿は頼もしい。

さて次は、どんな変革をみせてくれるだろうか。



photograph : 松橋晶子 (PPI)

私は歯科医療が好きなんです。  
これからも歯科医院を  
全力でバックアップしていきたい。